

編 集 後 記

臨床神経学の編集委員になり月日が経ち、編集委員の役得で多くの論文に目を通す機会が増えてきました。私は主にパーキンソン病及び関連運動障害学の分野を担当しております。最近気が付くことは私以外の査読者の目の鋭さです。おそらくそれぞれの施設において、多くの若い先生の臨床的指導を行い、彼ら書いた論文の指導経験が長い人たちなのだと推測します。自施設において診断、治療に苦慮した症例を経験したり、それらを論文化する時には、指導者はそれなりに気持ちのこもった、きめ細かい校閲が入ると思います。臨床神経学の査読においてもその時の感覚そのままに、あるいはそれ以上に厳しい査読がはいるようで、たいへん私も勉強になります。

その愛情のこもった厳しさ、きめ細かさのある査読に感心することが多いのですが、時に私と他の査読者の意見が分かれることもあります。原著論文では研究計画、解析の正確さ、さらに研究の限界などの記載が重要と考えますが、どこに重きを置くかで意見が分かります。でも実は症例報告の場合は、原著以上に意見が分かれることが多いのです。

わたし個人の評価においては、臨床神経学ですので神経

所見の記載が乏しい症例報告はやはり気になります。全く神経学的に何の症候もない高齢者がいるとは思えません。論文の主題はそこではないと思いつつも、関連あるとは思えない症候でも正確な記載が望まれます。エクソーム解析が多くなり、遺伝子背景を有するまれな疾患の症例が増えておりますが、こういった症例こそ遺伝子 - 表現型関連が重要になりますので、身体特徴から神経学的所見、画像、神経生理所見をしっかりと記載することにより報告の価値が高まります。これらはまた同じ遺伝子背景を伴いながら表現型の異なる症例報告を促します。症例報告はこれまでに診断に難渋してきた症例の診断に新しい道を開拓するもので、初発から診断までの過程、治療効果等すべては貴重で、その報告が埋もれずに新たな価値の連鎖を生みだします。ほかの領域にはない、難病の多い神経内科分野における情報交換の場として、古典的神経学と、最新の診断治療を融合させる場として、この臨床神経学を良質なものとすることが我々の責務であると思います。

(坪井 義夫)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」	第58巻 第5号	平成30年5月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		高 橋 良 輔
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 経 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>